



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

Title	中・上級日本語学習者のためのライティング：「専門日本語」クラスにおける実践報告
Author(s)	多田, 美有紀
Citation	[岐阜大学留学生センター紀要 = Bulletin of the International Student Center Gifu University] no.[2] p.[91]-[103]
Issue Date	2000-02
Rights	
Version	岐阜大学留学生センター (The International Student Center Gifu University)
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/3353

この資料の著作権は、各資料の著者・学協会・出版社等に帰属します。

中・上級日本語学習者のためのライティング

—「専門日本語」クラスにおける実践報告—

多田 美有紀

Writing strategies for intermediate and advanced Japanese learners
—A report of the "Japanese for academic purposes" class—

TADA Miyuki

It is one of the tormenting tasks for research students and graduate students from overseas to be required to write essays in Japanese. This paper is a report of the 1999 first semester "Japanese for academic purposes" class in the auxiliary Japanese course, which focuses on the construction of the essays. To make readers understand the essays, it is more important to understand the students' opinion than the accuracy of the sentence. In this class, students are not only required to write compositions by the usual composition method, but they are also given tasks to make their opinions clear by taking notes. Before the final draft, they must consider how to compose their essays and discuss it with the teacher. By analyzing their essays, the construction becomes clearer. However, there remains some problems: the lack of the grounds for the student's opinion, the lack of clarity of demonstrative pronouns. Through this class, some students who were initially reluctant to write essays in Japanese because they were worried about accuracy too much, gain confidence in writing essays in Japanese. This is also the effect of focusing not on the accuracy but on the construction.

1. はじめに

大学の研究生、大学院生である留学生にとって、日本語によるレポート作成は、困難なものの一つである。その原因には、教室で学習してきた日本語とは異なる日本語を大学から要求されるといふことがあげられる。単に話し言葉と書き言葉の違いが理解できているか否かという問題以上に、与えられるテーマについて考えることができ、その考えを明確に述べるという能力が問われるからである。

筆者は1998年4月から3期にわたって岐阜大学日本語補講コースの「専門日本語」クラスを担当してきた。「専門」と名づけられてはいるものの、受講者の専門は一様ではないので、学習者一人一人の専門における日本語指導は不可能である。つまり、このクラスは専門教育への橋渡しという位置付けである。このようなクラスに適切なテキストはなかったため、自作教材を使用してきた。しかし、このクラスはレベル別の編成ではなく、何期にもわたって受講する学習者も多いことから、自作教材の不備を修正しながら同じ教材を使うことができず、期ごとに教材を変えていかなければ

ならない。学習者はこういった事情を承知の上で受講してくるわけであり、それだけこのクラスに対する期待が大きいことが分かる。

本稿では、以上の状況を踏まえて1999年度前期（4月から9月までの全15回）に行った「専門日本語」ライティングクラスの授業報告を行い、専門教育への橋渡しとしての「専門日本語」クラスのあり方について考えたい。

2. コースの概要

岐阜大学日本語補講コース専門日本語クラスは週2回（1回は90分）であるが、曜日により異なる技能についてとりあげて授業を行っているため、同じ技能の授業は週1回しか行われていない。このクラスは受講制限を設けておらず（ただし、授業のレベルは中級後半程度以上の学習者を想定している）、受講する学習者の日本語レベルは、初級終了程度から超級までと幅広い。また、学習者の身分は研究生、大学院生、研究者、留学生の家族とさまざまである。授業は、諸事情により毎回出席できない学習者がいることを考慮して、一回完結型にしている。各期の授業は、学習者の学習したい日本語の技能が多様であるため、コース開始前にアンケートを実施し、その結果により組み立てている。

コース開始前に実施したアンケート（いずれも選択方式）で、日本語で困ることとしてあげられていたもののうち最も多かったのは、「日本語で上手に発表できない」、次いで「日本語でレポートや論文が上手に書けない」、「ゼミなどで自分の意見を説明したり、他の人と議論できない」であった（いずれも複数回答）。また、クラスで一番勉強したいこととして、「レポートや論文を書くための表現練習」、「日本語で発表するための表現練習」が最も多くあげられていた（2項目以内を選択）。このアンケート結果と、学習者の出席できる曜日をふまえ、筆者のクラスではレポートや論文作成のためのライティングを行うことになった。

3. 先行研究 —作文指導について—

中・上級レベルの学習者を対象にレポート・論文作成を行ったものには西端（1999）、有吉（1997）がある。西端は、上級レベルの留学生に対するライティングについて報告している。授業は、週2回の文型の授業、週1回のプレゼンテーションの授業と連携して、週1回行われていた。授業の目的は、専門教育とのつながりを考慮しながら研究活動に必要な日本語の能力を養成することである。授業内では、語句・表現文型・段落構成方法を学習した上で、文作や書き換え問題をさせているが、より論文形式に慣れるために、月に1回ほどの割合で小論文の作成課題を与えている。また、有吉は、中級レベルの就学生に対するライティングについて報告している。授業は週1回二時間行われ、小論文への橋渡しとして自分の立場を明確にし、意見をまとめて書く力を伸ばすことを目的としている。報告中で注目すべき点は、授業の進め方である。作文の授業は、文型を提示し、それを使ってどう書くのかは学習者に任せている場合が多いが、この授業では、書きたいことが明確になるまで教師と話し合うという作業をとり入れ、その後、文章化させているのである。

また、衣川（1995）は、上級学習者の作文産出過程を分析し、作文の目的によって産出過程が異なるため、作文を書く前にはあらかじめ誰に向けて書くのか、何のために書くのかを提示した方が

作文作成が円滑であることを指摘している。

これらの先行研究と、先に述べた「専門日本語」クラスを行う状況を考慮して、書くことよりも書く前段階に焦点を当てたライティングを行うことにした。具体的には、書く前に各自が書きたいことについてメモをし、各項目のつながりを考えて取捨し、順序を考えて構成した後、教師と話し合っ自分の考えをレポート形式にまとめる、という手順で行う。また、学習者のレベルが異なることから、早く書ける学習者は毎回違うテーマで、書くのに時間がかかる学習者は何回かをかけて1つのテーマについて書きあげてもよいことにした。毎時は、課題について書かせるだけではなく、書く前に、レポート²⁾作成の際に使ってほしい文型を提示し、それぞれどのようなときに用いるのかも意識させることにした。

4. シラバスの作成

以上の考えに基づき、シラバスをたてた。課題を与える際には、衣川の指摘から、ある目的を設定することにした。その目的とは、紹介する、説明する、意見を述べる、である。さらに、これらの目的を達成する際に共通すると思われる問題点（指示語や文末表現など）は、具体的な課題に入る前に提示した方がよいと考え、課題を課さずに問題点を提示する問題をするという時間を3回とった。教材の作成に当たっては、『実践にほんごの作文』（佐藤政光・加納千恵子・田辺和子・西村よしみ著 凡人社）『表現テーマ別にほんご作文の方法』（佐藤政光・田中幸子・戸村佳代・池上摩希子著 第三書房）を参考にした。

以下に授業内容を示す。

表1 「専門日本語」クラス授業内容

日	目的	学習内容 (レポート課題)
4/21	ガイダンス, 分かりやすい文を書く	書き言葉についての概説と問題
4/28	紹介する①	接続詞の使い方, 内容の吟味 (自己紹介)
5/12	紹介する②	副詞の使い方, 文と文の関連の付け方 (岐阜の紹介)
5/19	紹介する (復習)	学習者が書いたレポートのよい点, 悪い点を考え, 自分が提出したレポートを再吟味する
5/26	読む人を考えて文を書く	分かりやすい説明の仕方
6/2	説明する①	説明の表現, 説明の仕方 (内閣支持率, 円相場, 株価, 見合い結婚と恋愛結婚のグラフ)
6/9	説明する②	グラフを使った報告の表現, 報告の仕方 (各自持参のグラフ)
6/16	説明する③	検証の表現, 検証の仕方 (脳死判定, ビタミンCの摂取と風邪予防)
6/23	意見文・事実文を書く	文末表現の違い
6/30	意見を述べる I-①	引用の仕方, 意見を述べるときの論構成 (老年人口の増加)
7/7	意見を述べる I-②	引用の仕方の再確認, 意見を述べるときの表現 (自動販売機の設置凍結)
7/14	意見を述べる (I復習)	意見を述べるときの表現の再確認
7/21	意見を述べる II-①	(簡約日本語をめぐって)
9/1	意見を述べる II-②	(原子力発電をめぐって)
9/8	アンケート	

1999年度前期は、紹介する、説明する、意見を述べる、という3つの目的を取り上げることにしたが、それらは次のように積み上げることを意図して配列した。「紹介する」では、身近なことについて書くことにより、論構成に注目させ、今後レポート作成をする上での基礎とする。それをふまえて、「説明する」では、グラフなどを説明することにより、情報の読みとりと論旨に必要な情報を見極めて取捨できるようにし、自分の述べたいことに合わせて情報を使うことができるようにする。そして、「意見を述べる」の前半（表中の「I」）では、ある事実に対して自分の意見がまとめられるようにする。「意見を述べる」の後半（表中の「II」）においては、ある事実に対する様々な意見をふまえた上で自分の意見を述べるという、少し発展させた論構成で書けるようにする。

5. 授業の流れ

レポート作成の際に共通すると思われる問題を提示する授業においては、留意点を提示し、定着をはかるために文の書き換えや空欄補充などの練習を行った（4/21, 5/26, 6/23）。

レポートを作成する授業においては、レポートを書く際に必要となる文型・表現を提示し、それらを使った文作成などの練習問題を行った。その後、課題を与え、課題について各自の考えをまとめた。課題が文章である場合は、読み、内容を全体で確認するために、内容についての質疑応答や意見交換を行い、各自の考えをまとめた。考えがまとまった学習者からメモ書きを行い、メモが書けた学習者は教師に書きたいことを説明し、教師と内容や書き方の話し合いをした後、清書し、提出した。作成するレポートは、書くべき内容を最小限にとどめ、論構成に焦点が当てられるように、また、短時間でまとめられるように、A5版1枚の用紙にした。提出されたレポートは、訂正すべき所がある場合には訂正を加え、翌週の授業で返却し、質問を受けた。

また、回収したレポートを見て、もう少し詳しい説明や練習が必要であると思われた5月19日と7月14日においては、返却したレポートで、自分の使った文型や表現についてチェックし、クラス全体で学習した項目の使い方を確認したり、それらの項目に関連した新しい文型や、派生的な使い方を提示するなどして、再度定着を図った。

6. 学習者のレポート

ここで、授業で合計10回課したレポートのうち、5回以上レポートを出している8名の学習者の論構成と構成の内容について、分析を行う。なお、学習者のレポートは、文法、表記の間違いもそのままのせるが、分析対象箇所である 部分に注目してほしい。学習者の後に付した()は、その時点での、学習者のレポート提出回数である。

表2 分析対象の学習者

学習者	国籍	身分	レベル ³⁾
A	中国	研究生	中級
B	スウェーデン	交換留学生	中級
C	韓国	交換留学生	中級
D	オーストラリア	交換留学生	上級
E	マレーシア	研究生	上級
F	中国	大学院生	上級
G	中国	大学院生	上級
H	中国	研究員	超級

6.1. 論構成に関する問題点

本授業の第一の目的であった論構成は、コースの最初の段階から考えさせるようにしたため、課題の難易にかかわらず、ある程度はできていた。

レポート例1) C(1)

「岐阜の紹介」

私は自転車に乗っていったり来たりするばかりだから、まだ岐阜について分からない。でも、き

れいだし、人々が親切なので、いいところだと思う。でも、JUSCOはよく行くので、JUSCOを紹介する。

位置はあまり遠くない。学校から自転車に乗って、14分ぐらいしかかからないからである。食べ物や、服などいろいろな物品がある。また、ボーリング場があるのでスポーツもできる。

このようにJUSCOは家に近いし、便利なところだ。

だから、JUSCOがある岐阜はいい所だと思う。

この例における論構成は以下の通りである。第一段落で今から何を紹介するのか、それを紹介するのはなぜかを述べて序論としている。本論である第二段落では紹介したいところを説明し、第三段落ではそこにより評価を与え、岐阜をよいところだと考える理由としている。これらを受け、第四段落で結論を述べている。各段落間の関連が明確であり、何を言いたいのかがよく分かると言える。

レポート例2) C(5)

「原子力発電をめぐる」

原子力発電に賛成側だ。

費用側面で反対するのは無理だと思う。なせなら建設費は高いが、いつか石油や石炭は物的資源だからなくなるので、次のエネルギー資源を発展させなければならない。もちろん、風力、火力、水力をもっと発展させる方法もあるが、それは自然の変化によって利用するから、せいにかくに予測するのがむずかしい。

また、原子力を発展させたら、外国から輸入をしなくてもいい。

とにかく、原子力発電がどんな影響を及ぼすかはっきり分からないが、安全な基準を維持しながら発展させた方がいいと思う。

このレポートでは、序論で自分の意見を提示し、本論で自分の意見の理由づけを行っている。そして、原子力発電を発展させた方がよいという結論に至っている。接続詞の使い方など、不適切な部分もあるが、論構成が明確であるため、書き手の意見が何であるか、なぜその意見に至ったのかがよく分かる。

この学習者の例では、序論、本論、結論以外の部分でも段落分けを行っている点が気になるが、概して、論構成が積み上げられており、課題に左右されることなくできるようになったと言える。

しかし、一方で、課題が難しくなると論構成ができなくなる学習者もいた。これは、冒頭でも述べたように、日本語の問題ではなく、与えられた課題についての知識を持っているか否か、興味を持ったか否かなどの要因にも左右されたと考えられる。

レポート例3) D(4)

「老年人口の増加」

生産年齢人口と年少人口の構成比における問題が言われている。

この問題は図1や図2の資料によると前述の総人口の部分が同時に減少したら、老年人口は増えると予測される。そうすると誰がその老年人口を支えるのかという経済上の問題が出て来る可能性

がある。

この例の第一段落は、現状を述べ、これからその説明を行うことを表明するという序論である。そして、第二段落で資料の説明とそこから今後予測される問題を述べている。資料の読み取りによって予測に至ったのであるから、ここでは、段落を変え、本論で資料の説明、結論で今後の予測、としなければならない。しかし、段落を変えて最後の文（ 部分）を結論部分としても、「問題が出てくる」と新たな現象を提示しており、その問題をどう対処すればよいのか、あるいは筆者はその問題に対してどう考えているのか、といった意見を述べていない。もう一文、予測に対する筆者の意見・評価を入れて結論としなければならないだろう。

また、意見はあるが、それを十分に述べられていないものも見られた。

レポート例4) A (4)

「自動販売機の設置凍結」

これは豊田市の公共施設への自動販売機の設置について述べる。

私は自動販売機を設置してもいいです。しかし、どこに設置一番合理、それは大切の問題と思われる。通商産業省平成9年商業統計によると、自動販売機は販売額の中に、2番目です。そして自動販売機はとても便利で、時間を節約する。だから、人気がある。一方で、もし自動販売機があるすぎたら、環境に影響する。だから、自動販売機を設置するはずで、そして、あちこちに設置ではいけない。人が多いところに設置するだけ。

序論では、今から何を述べるかを表明している。本論では、自分の意見とその理由づけに資料を使っており、文法的な正確さには欠けるが、ある程度言いたいことが推測できる。しかし、本論の後半（ 部分）はこれから自動販売機をどのように設置すればよいか、を述べており、これは段落を変えて結論とすべき部分ではないだろうか。

例3)、例4)などのように課題によっては、論構成が不十分な場合もあったが、序論と本論に分けるところまでは行っており、文の構成を考えて書く、ということは意識していたのではないかと思われる。

6.2. 内容に関する問題点

グラフを使う練習を何度か行ったため、必要な情報を選び取り、それを発展させていくという形でレポートを書き進めることはできていた。また、コース開始時には、意見が述べられないのではないかと思われた課題に対しても、学習者が自分の理解に合わせて何とか意見を述べており、何らかの意見を持っていること、意見を持とうとしていることが窺えた。

しかし、物足りない部分もいくつか見られた。それらを以下の①～④にまとめる。

①序論と結論の不一致

レポート例5) F (4)

「老年人口の増加」

本論文は日本の将来人口についての比較研究することを目的としている。

2010年以後、生産年齢人口は減りつづけるが、老年人口は増えることで経済不景気になると言われている。図2年齢を3区分に分けるによると、生産年齢人口は約20年後で70%から60%までになる。老年人口比率は30年後には、15%から30%までになる。だから、将来、老人の問題は今よりもっとも厳しいことと言える。

こうしたレポートは、序論の典型的な表現型を学習したあとに見られた。「序論の表現」として固定してしまったものと思われるが、フィードバックの際に指摘していたにもかかわらず、修正されなかった。これは、上級学習者にしか見られなかったため、この表現を理解し、使おうとするあまりに、過剰一般化してしまった結果であると考えられる。

②説明の理由づけの欠如

レポート例6) H(5)

「老年人口の増加」

国立社会保障人口問題研究所は平成7年に行った国勢調査のデータによると現在日本の年少人口は約15%であり、20年後もあまり変わらない。これに対し、現在生産年齢人口は約70%であるが、20年の後に約60%になると言っている。生産年齢人口はこのまま減っていくと、今後の日本の経済の維持に様々な困難が予想されている。生産年齢人口は減らないように、子供をたくさん産むのは大切だと思う。

最後の文「子供をたくさん産むのは大切だと思う。」という結論に至った理由が書かれておらず、その文の前までに述べられていたこととの関連が明確ではない。このように内容が不十分であったレポートは、メモ書きから清書に移行する際に、教師に説明した内容を正確に文にできなかった、結論は清書をしながら考えると言ったものの、結論に至らなかった、などの原因が考えられる。

③指示語の不適切な使用

レポート例7) B(4)

「老年人口の増加」

日本の人口問題について論説を調べるとおもしろいことが分かる。将来は大きな問題になると思う。

たとえば、論説によると、現在の老年人口は15%から30年間の間に30%になって生産年齢人口も70%から60%まで減少すると言っている。

それは難しいことだと思う。国立の経済にとってよくないことである。日本の工業と産業には労働者が不足するかもしれない。この問題の解決は何だろうか。たぶん日本の定年を上げなければならないと思う。現在日本は過密だからいい点もあると思うが最初問題を解かなければならないと思う。

このレポートには2箇所指示語が使われているが、指し方が不適切である。「それは」は「この問題は」に変えれば意味をなす。「この問題の」の「この」は前文を指すのであろうが、前文は「～かもしれない」と実現が不確定であるため、「このような」とするか、前文を「～と思われる」

と断定すれば、適切になるであろう。

④語彙と文型の不釣り合い

レポート例8) D (6)

「原子力発電をめぐって」

原発は日本の全発電量の3割を占めるなら、原子力発電が発電の方法としてとても大事な方法に違いないのではないか。原発が廃棄されたら、その全発電量の30%をどうやって取り替えるのか。日本が天然資源を保護した方がいいと私は思うが、原発事故が起こらないように、地震などの防護措置をとって、しっかりと維持しなければならない。そうすると、国民は安心し、原発の値段や効率に対する利益が国民の不安を乗り越えられるだろう。

「廃棄」と「どうやって取り替える」、「防護措置をとって」と「しっかりと維持」というようにある言葉を辞書でひき、漢語で書いているが、後続の語句は自分の知っている語彙で書いているために不釣り合いな印象を受ける。また、最後の文は他の文に比べて漢語が多用されていることから、ほとんど辞書に頼ったと思われるが、文意が通っていない。辞書を使わずにレポートを作成することは不可能であるが、各自が辞書をひき、その語彙を用いた際に、語彙についての情報も提示する必要がある。しかし、混乱する学習者も予想されることから、余裕のある学習者に提示するにとどめておいたほうがよいと思われる。

このように、構成に比べ、文法や内容については不十分なものが多かった。しかし、構成と違い、誤用であることが明確なものが多いため、自分で訂正できるものもあり、また構成ができていれば専門のレポートや論文を書いた際にも、何が言いたいのが構成から判断できるので、指導教官も効率よく修正を行うことができると考えられる。

7. 学習者の感想

コース終了時に書いた感想を見ると、本授業はおおむね好評であり、授業の意図を理解し、自分のレポート作成が上達したと感じていたことが窺えた。しかし、「レポート作成の前にもっと皆と話し合う時間がほしかった」、「自由にレポートを書くと、学習した文型を使わないことが多いので、空欄補充でレポートを書く練習もしてほしかった」といった希望もよせられた。レポートを書く時間を多くしようとすると、書く前の練習の時間が少なくなってしまう。一方、練習を多くすると書く時間が少なくなってしまう。一回完結型の授業ではどちらかに比重を置かざるを得ないのが現状である。どちらも十分な時間をとるためには、二回程度で完結するような授業に変える必要があるだろう。

また、クラス構成に関して、「学習者のレベルがバラバラであったため、基準や定員を設けてほしい」といった要望があった。これは、書く前の話し合いの作業時に、課題に対する意見が出せる学習者は活発に話し合えるが、課題を理解するのに時間がかかる学習者は話し合いに参加せずまわりの学習者に説明を受けたりしていたため、クラス全体としての活動ではない状態であったことが原因であろう。自分の持っている能力を駆使して書く、ということを重視したため、今回は受講できる学習者の制限を設けず、学習者の日本語レベル、課題の理解度に応じて、レポートを作成してもらったかったのであるが、今後は学習者同士の関係をもっと配慮すべきであろう。

8. おわりに

コース開始時には書くことに対して構えていた学習者も、回を重ねるにつれ、自信がつき、書き慣れてきたように見受けられた。また、自分の考えを書き連ねるのではなく、考えを出し、構成を考えてから書く、というステップを踏ませたことで、自分の意見を分かりやすく書こうという姿勢が出てきたように思われる。文法の正確さには不十分な点が見られたが、不十分な文から、何が言いたいのかを読みとることができれば、今後、指導教官や日本人学生が日本語のチェックをする際には、修正が加わった結果、日本語の問題はなくなったが、本人が述べたい内容とは全く異なってしまう、ということが少なくなるのではないだろうか。

しかし、提出されたレポートを見ると、メモ書きから構成の吟味へ、さらに清書への移行が円滑に行えていないものがあり、各ステップへ移行する際の橋渡しが必要ではないかと思われた。また、本授業は、論構成に関しては単純なものから複雑なものへと積み上げるように配慮したが、構成以外の要素については、考慮しなかったため、構成以外の部分でのつまづきが見られた。今後、論文作成の積み上げ方について、再度考える必要があると思われる。

コース開始時に、学習者のレベル、進度に合わせて、レポートを作成してもよいと言ったが、実際に授業になると、自分だけが遅れていることは恥ずかしいと感じるのか、考えがまとまらずに書き始めたり、教師との話し合いをせずに書き始めてしまったりする学習者がいた（考えがまとまり、話し合いを終えた学習者にのみ清書用紙を配布したのであるが、先週書かなかった分の用紙で勝手に書いたりしていた）。そのような学習者のレポートは、構成の順序はできていても、内容が伴っていないものであった。学習者に書くことへの焦りを感じさせないためにも、「ゆっくり書いてもいい」と言うだけではなく、学生同士で話し合うなどの活動をなどを行い、学生間のひずみが少なくする工夫が必要であろう。

本授業の目標は日本語の正確さ以上に、自分の意見や書きたいことを明確にすることであった。授業内では一定の効果が見られたが、学習者が専門で日本語を用いる手助けになっているかどうかについては、学習者が専門で日本語をどのように使えるようになったのかを調査する必要があると思われる。

注

- 1) 1999年度前期に行われたもう一つの「専門日本語」クラスは、まとまった話(スピーチ)をする、というものである。
- 2) 「レポート」にはさまざまな定義があるが、本稿では、本授業で書かせたものを「レポート」ということにする。作文よりもかたい文であるが、小論文ほど長くないものである。
- 3) 日本語のレベルは、日本語レベル別に関講されている授業を受ける際に行われたプレースメントテストの結果を参考にし、提出された作文とあわせて判断した。

参考文献

- 有吉英心子 1997「日本語教育における作文指導の研究—中級レベルの就学生を対象とした場合—」
『地域文化研究』創刊号 東京外国語大学大学院地域文化研究会 pp.133-156
- 柏崎雅世・池田智子 1995「3学期プログラムとしての『専門日本語・経済』の方法—『アクション

クト・プログラム』の試みー」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』21
pp.127-140

衣川隆生 1997「作文の課題によってどのように文章産出過程が変わるかー上級日本語学習者の場
合一」『筑波大学留学生センター紀要』12号 pp.89-104

西端千香子 1999「論文作成を目指す日本語の『書き』の授業実践とその有効性と問題に関する考
察」『広島大学日本語教育学学科紀要』第9号 広島大学教育学部日本語教育学科 pp.31-
39

資料

使用ハンドアウト

意見を述べる ①引用のしかた ②意見を述べるときの論構成

引用のしかた

- ・言葉をそのまま使う
～は「・・・」と言っている。
- ・意見をまとめて使う
～によると・・・(という)。
- ・一般的な意見
・・・と言われている。

注意)「そうだ」はあまり使いません。

意見を述べるときの論構成—ある事実に対する意見を述べる場合— 事実→意見の順番で書く場合

意見→事実の順番で書く場合

読みましょう

平成7年国勢調査をもとに、国立社会保障人口問題研究所により、日本の将来人口の推計が行われた(1999年1月)。

図1を見てほしい。これは総人口の推移のグラフである。高位は人口増加が最も多い場合を、低位は最も少ない場合を表している。これによると、2010年以前に人口は最大となり、それ以降は減少すると考えられている。

人口の変化は経済に大きな影響を与えるが、それ以上に年齢構成の変化も大きな問題である。図2は年齢を3区分に分け、それぞれの人口の推移を表したグラフである。生産年齢人口は15才から64才まで、年少人口は0才から14才まで、老年人口は65才以上である。

特に注目すべき点は、現在生産年齢人口が全人口の約70%で、今後は減り続け、約20年で60%になる点である。生産年齢人口は、さらにその後も減り続け、総人口の半分近くにまでなる。反対に、老年人口比率は現在約15%であるが、30年後には30%近くにまで増えると推計されている。

このデータから、今後の経済の維持にさまざまな困難が予想される。

(参考資料:「生産年齢人口の定義の再考」<http://www2.nsknet.or.jp/~hamamatu/butai/jinko/suikei/popsuik/jinkosui.html>)

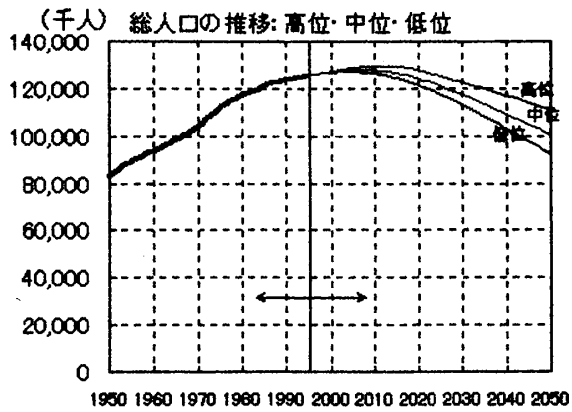


図 1

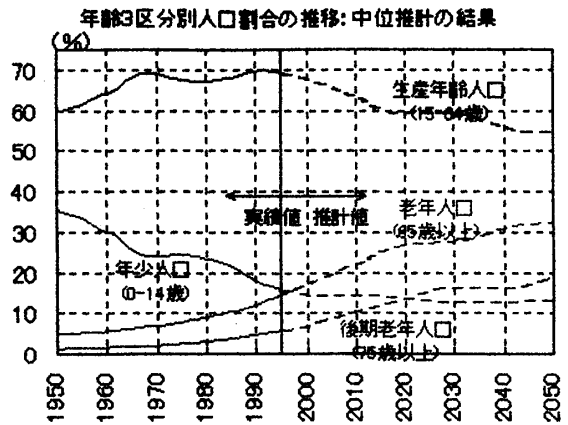


図 2

考えましょう

この結果・データに問題点^{もんだいてん}はありますか。

この問題^{もんだい}はどうすればよいと思いますか。

書きましょう

人口問題^{じんこうもんだい}について、意見を述べてください。できれば、意見を述べるときに、資料^{しりょう}を使つてください。

<メモ>

自分の意見: _____

意見を述べるための事実: _____

始め方: _____

終わり方: _____

書く順番はどうしますか。